

それでも恋はやめられない

目次

それでも恋はやめられない

5

やっぱり恋はやめられない

227

それでも恋はやめられない

## プロローグ

さつき読んでいた小説に、失恋はほろ苦いチョコレートの意味だと書いてあった。その一文に納得がいかず、本を閉じ、ベッドの横にある今にも崩れそうな文庫本の塔のてっぺんに乗せた。——もう読まない。そういう意志をこめて。

ほろ苦いどころの騒ぎじゃないのだ。失恋とは、悲しくて辛くて、消えてなくなってしまうようになるような絶望を伴う。

言うなればこの世の終わりだ。

百歩譲って、ほろ苦チョコだとしよう。けれど、それは本当の恋じゃない。

大好きな人からの愛情を失ってなお「ほろ」苦いなんて言っていられるのは、その人のことをそれほど好きではなかったからだ。きっと、尊敬や憧れ程度だったのだろう。

『ごめん、有紗』

耳元であの人がささやいた気がした。

申し訳なさそうに、でも自分の決心は鈍らせまいとしている声で。

『ごめん、有紗。本当にごめんな』

すっぽりとシーツを被り、頭の中に響いた彼の声をかき消そうと試みる。けれど、一冊の文庫本が挟んだ傷口は、まだ全然癒えず、じくじくとしている。

謝るくらいなら、別れの言葉なんて口にしなくて欲しかった。

付き合い始めて二年と少し。それまでに別れを予兆するような大きなケンカは一度もなかった。

お互いの誕生日やクリスマス、お正月、バレンタイン、ホワイトデー。イベントごとでも大方二週し、それらすべてを一緒に過ごした。

ごく自然な流れで婚約を交わし、これから先もずっとこの人と過ごしていける——そう信じて疑わなかったのに。

『好きな人が出来たんだ。婚約はなかったことにしてほしい』

あの瞬間の衝撃を、私は一生忘れないだろう。

好きな人？ 婚約はなかったことに？ 一体何を言っているの？

停電が起きたときみたいになつと明かりが落ちて、目の前が真っ暗になった。すぐそこまで迫っていた愛する彼との温かな未来が、崩れ落ちていったのだ。

失恋は、かんだ唇からにじむ無機質な鉄の味。

愛した人に裏切られ、ずたずたに打ちのめされた私——藤堂有紗が言うのだから、間違いない。

同僚の鷹取直行と別れたタイミングは最悪で、社長や同僚に彼との婚約を告げた直後だった。ウェブページ制作やデザインなどを請け負う小さな事務所。その中で、私たちの破局が伝わるのに時間がかからなかった。仕事はやりがいがあり、辞めたくはなかったけれども、周囲の労わるような——でも少し好奇の交じった視線に耐えられず、私は逃げるように職場を去ったのだ。

それからの日々は限りなく退屈で、憂鬱なものだった。何もやる気がしない。朝、目覚めてからカーテンを開けるのはおろか、身体を起こすのすら面倒に感じ、夕方までベッドの中で過ごす。そして、気が付いたら一日が終わり、また不毛な明日がやってくる。

もうどうでもいいと思った。これから先何が起きたとしても、直行と過ごしたあのときよりも幸せな時間はやってこないだろう。

彼と婚約していたころは、目に映るもの全てが輝いていた。

そんな朝露に濡れたバラみたいに鮮やかに見えた世界は、あの日を境にモノクロームな色調に変わってしまったのだ。

時折楽しかったころを思い出しても、未だに手放せないでいる婚約指輪を薬指にはめたりした。

ホワイトダイヤの両サイドに小さなピンクダイヤが並ぶ、可愛いエンゲージリング。見つめれば見つめるほど、もらったときの嬉しさや感動が昨日のこのようによみがえり、泣けてくる。

もうあのころには戻れないんだと思うと、涙が止まらなかった。

『好きな人が出来たんだ。婚約はなかったことにしてほしい』

イルミネーションの躍るクリスマスイルカの街。おあつらえ向きとばかりに雪がちらつき始め、これからもずっとこうして彼と過ごすんだな——と、ときめきを覚えていたのに。その気分から一転、私を絶望に突き落とした直行は、今は事務所の後輩である滯ちゃんと呼び合っているという。元同僚が憤りをまじえた口調で教えてくれた。どうやら、直行は二股を掛けていたらしい。

最近売り出し中の清純派女優によく似ている滯ちゃんは、周囲からしつかり者だと言われる私とは全く違うタイプの、甘え上手な女の子。私に懐いてくれていた彼女が浮気相手だと知り、尚更シヨックだった。

事情を知った上司や同僚たちは、彼らの扱いに苦慮したようだ。その後、直行と滯ちゃんは二人揃って事務所を辞めたらしい。厳しい視線を向けられて、彼らも居づらかったのだろう。

一人娘の結婚を心待ちにしていたうちの両親はカンカンで、「出るどころに出ましよう」と息まいていたけれど、私はそれを止めた。心に深いダメージを負っていた私に、直行を責める気力なんて残っていなかった。

——彼は私じゃなく他の女の子を選んだのだ。

これ以上傷を抉るようなことはせず、ただただ放っておいてほしかった。

直行とは結局それつきり会っていない。私は弱り切った心を守るため、他人との接触を避けるようになっていった。

私に足りなかったものとは何なのだろう？ 私の何がいけなかったのだろう？

悶々もんもんと考え続け部屋に閉じこもる娘を両親は不憫ふびんに思ったようで、しばらくの間は傍観ぼうかんを決め込み、好きにさせてくれた。けれど、退社から二ヶ月近くが過ぎてても一向に立ち直る兆きざしを見せないことに、最近では焦り始めているようだ。

先週くらいから、母親が「そろそろ春物の洋服でも買に行かない？」とか「知り合いのお店でアルバイトを探してみるみたいなんだけど」とか、やたらと私を外に連れ出そうとしてくる。

私も一応分別のある大人。まだ二十五でやり直しがきく歳なのはわかっているし、いつまでもこのままではいけないという気持ちもある。他者とかかわることから逃げ、働きもせずに家に引きこもっているなんて絶対に不健全だと。

だけどどうしても気力が湧かなかった。

二月も終わりがけたある日。たっぷりと睡眠をとって起床した私は、ベッドに寝転がったまま手を伸ばし、リモコンでテレビの電源を入れた。

この時間帯は主婦向けのワイドショー番組をやっている。特に興味はないけれど、ボタンを操作して音量を上げた。ひとりで過ごす時間を寂しく思わないようにするためには、BGMが必要不可欠だ。

テレビから聞こえる、夫に対する愚痴ぐち特集とやらを右から左へ流していると、部屋の扉がノックされた。

「ねーちゃん、起きてる？」

末の弟、友也ともやだ。

「うん」

その場で短く返事をすると、扉が開く。

「何だ、起きたばっかかよ」

友也は私のパジャマ姿を見るなり、男のくせに綺麗に手入れをしている眉をひそめた。

「下でかーさんが呼んでる」

まただ。母親からの「外に出ましよう攻撃」は、このごろ特に激しい。

断ると悲しい顔をされるから心苦しいのだけれど、気が乗らないものは仕方がない。

「わかった、今行く。……これからバイト？」

「そ。オレたち学生は今が稼ぎドキだから」

大学生の友也は今、春休み中だ。某有名チェーンのコーヒーショップでバイトをしていて、この長期の休みにはシフトを増やしたらしい。かなり忙しそうで、ずっと家にいる私でさえ、最近ばかり顔を合わせない。

「よくそんなにがんばるね」

思わず言った私に、友也はあっさりと、未来を見据えた答えを告げた。

「オレも早くにーちゃんたちみたいにひとり暮らししたいし、そのためには金貯めなきゃ」

私には友也の他に、優也と幹也という弟がいる。彼らは就職を機に関東の片田舎であるこの地元を離れ、優也は東京、幹也は大阪と、それぞれ都会で自活しているのだ。

長男の優也はすでに家庭を持つている。姉の私よりも先に運命の人を見つけるなんて、ねたましい——違った、うらやましいヤツ。

「つーことで、ねーちゃんみたいにグータラしてらんないの。そんじゃ」

傷心の姉に対してその言い方は酷くないだろうかと思うけど、デリカシーのない弟三人に囲まれて生きてきたので慣れっこだ。それに、こんな不毛な生活をしていて申し訳ないという気持ちもあつて、何も言い返せなかった。

友也が階段を降りていく足音が聞こえなくなったところ、テレビを消してベッドから降りる。

さて今日はどんな誘いが来るのだろう。そして、どうやってやんわりと断ろう。

小さく息を吐いて、母親の待つ階下のリビングへと向かった。

「おはよう、有紗」

リビングの扉を開けると、母が掃除機をかける手を止めた。

「おはよう」

「ご飯食べるでしょ？」

「うん——でも、話って何？」

食事の支度に取りかかろうとキッチンへ向かう母に声を掛ける。

大方の予想はついているけれど——と思った私だったが、母の反応は予期していたものと違っていた。

「そうそう、そうなのよ。有紗に聞いて欲しいことがあるの」

片手を招き猫のようにちよいちよいと曲げながら告げる声は、心なしか弾んでいるようだ。

普段よりテンションが高めなその様子に戸惑いつつ、招かれるままダイニングテーブルに腰を掛けた。

「ねえ、従弟のレイくんのこと、覚えてる？」

「レイくん……」

母の言葉をなぞりながら、ああ、と頷く。

「もちろん、覚えてるよ」

レイくん——母の姉のひとり息子である、神村礼二郎くん。一つ年下の従弟だ。

私が中学生になるくらいに、伯父さん——レイくんのお父さんの転勤で彼らが東京に引っ越すまでは、神村家のご近所さんだった。家同士の交流も多く、私も弟がひとり増えたみたいで楽しかったっけ。

とはいえ、彼とはもう十年以上も会っておらず、母から伝え聞いた近況しか知らない。確か、大学卒業後は東京の会社で営業職に就いたって言っていたような。

「実は今、レイくんの会社が社員さんを募集しているらしいのよ」

「へえ、そうなんだ」

「由香利にね、有紗が新しい就職先を探しているって言ったら、レイくんはその話が伝わったみたいで。それで、有紗にどうかしらって」

由香利とはレイくんのお母さんの名前だ。

『ふうかしら』(つづいて)

「せっかくだから面接だけでも受けてみない？ 何でも、デザイン部門のウェブデザイナーが足りないんですって。有紗は経験者だし、ピッタリでしょう」

私がこの間までデザイン事務所ウェブ専門のデザイナーをしていたので、母はちょうどいいと考えたようだ。

それから母は嬉々とした表情で、レイくんが働く会社について教えてくれた。そこは、マーケティング事業を根幹としつつ、インターネットでの広告配信やイベントのプロデュースなど、幅広く手掛けているらしい。

「どうって言われても、採用してもらえるかどうか……。それに東京の会社なんですよ。うちからじゃ通うのは難しいんじゃないかな」

都心まで電車で二時間かかるので、さすがに毎日通うのは厳しい。

「それでね、お父さんとも話したんだけど……。有紗もこれを機に東京で暮らしてみたらどうかなって」

「えっ？」

寝起きで働いていなかった頭が一気に覚醒した。

だってこれまで、弟たちには都会での生活を許しておきながら、私には「家に残って欲しい」と訴え続けていたのは、他の誰でもない、父と母ではないか。

「……私が東京に行くの、嫌がってたのに。急にどうしちゃったの？」

「だって娘を東京に出すのって、親としてはすっごく心配なのよ。ほら、優也や幹也は男の子だからそんなに危ないこともないでしょうけど」

「昔、東京の大学に行きたいって言ったときは反対したじゃない」

かつて私が東京の美大に行かせてくれと頼んだときは、首を縦に振ってくれなかった。一人娘に何かあってはいけない——という親心はありがたく受け取るけれど。

「今だって諸手を挙げて賛成はできないわよ。有紗も社会人になったとはいえ、やっぱりひとり暮らしさせるのは不安なもの。でも、レイくんが『それなら僕が暮らしてる家にどうぞ』って言うてくれたのよ」

「レイくんの家？」

「神村さんの弟さんが今、海外勤務でね。その間、そちらのお家を借りて住んでいるんですって」なるほど、レイくんは今、レイくんの叔父さんの家に住んでいるってことか。

「部屋も余ってるみたいだし、レイくんと一緒にならお母さんも心強いから。どう、有紗？」

「……どう、って言われても」

困惑するしかなかった。てっきり近所に散歩でも……。くらいの誘いかと思いきや、就職口の斡旋



をされるとは。しかも、ずっと行きたかった東京の会社だ。

母は、はっきりした反応を見せずにテーブルの木目ばかりを見つめる私に苛立つこともなく、穏やかに言った。

「いきなりだったから、戸惑うのもわかるわ。けどね、そろそろ新しい一步を踏み出してみてもいいんじゃないかしら」

はっとして顔を上げると、そこには母の優しい微笑み。

「直行くんのお母さんも腹が立ったわよ。有紗が辛い思いをしたっていうのは、同じ女としてわかるつもり。でも、いつまでも塞ぎこんでいても仕方ないでしょう」

「……………」

「あなたは長女だから、できればこのまま地元に残っていて欲しいけど……でも、もし有紗が環境を変えて頑張ろうって——ずっと行きたがってた東京で心機一転やり直そうって考えてくれるなら、それもいいのかなくて、お父さんと話し合ったの。ま、採用されるかどうかはわからないけどね」

最後は少しふざけた口調で言う、母は立ち上がり、キッチンへ向かう。

「……ゆっくり考えなさい。わかった？」

その背中を見つめながら、私は「はい」と答えた。

朝食を終えて自分の部屋に戻った私は、ベッドに横になって母の話を思い返す。

『そろそろ新しい一步を踏み出してみてもいいんじゃないかしら』

私もずっと考えていた。ほぼ一日中この場所で過ごす不毛な日々を、何とか変えたいと。

働くことが嫌いなわけじゃない。というより、むしろ好きだ。外に出るのが苦痛なわけでもない。

直行との別れによってすべての原動力を失ってしまっただけなのだ。

「東京で就職、か……」

ぼつりと声を出してみる。

大学時代には叶わなかった、憧れの東京での生活。悪くない響きだ。

もしかしたら、これが転職というものなのかもしれない。

地元で生活していると、直行たちと出くわしてしまう可能性がある。そのとき、彼女だった潘ちゃんは奥さんになり、お母さんになっているかもしれない。

まだ彼への気持ち完全に吹っ切れていない今、そんな事態は絶対に避けたい。

「……………」

逃げているだけかもしれないし、建設的な動機じゃないかもしれない。でも、それでも構わない。どうにかしてこの生活を変えなきゃ。このままじゃ私は本当にダメになってしまう。

母の言う通り重い腰を上げて、新しい一步を踏み出すときなのだ。

地元を離れるのは初めてだから、正直なところ不安もある。けれど、あっちには優也もいるし、それに——

「同じ家にレイくんがいるんだもんね」

そう声に出すと、脳裏に幼いレイくんの顔が浮かんだ。

最後に会ったのは、確か彼が中学生になったお祝いするとき。でも、最も私の印象に残っているのは、うちと神村家の交流が一番頻繁だった十五年くらい前、つまり彼が小学三、四年生の頃の姿だ。色素の薄い柔らかな髪に白い肌。小さな顔には、長くてくるつとカールした睫毛とぼちりした瞳が並んでいた。女の子顔負け、いや、まさにお人形さんのような綺麗な顔立ちだった。

同じ男の子でも、やんちゃでうるさかったわが家の弟たちとは全然違っていた。外で友達と遊ぶよりも部屋でひとり本を読むのを好む、大人しくて人見知りする子だったつけ。だからか、覚えてるのはどれも困った顔か、泣きそうな顔ばかり。

それでも私には心を開いていたみたいで、「ありさおねえちゃん」と呼んで、慕ってくれていた。私もそんな彼が可愛くて、女大将よろしくいつも後ろに連れて歩いていたので。

彼が他の男の子にいじめられているときは、身体を張って闘ったりもしたなあ。

四姉弟の一番上っていう責任感がそうさせたんだと思うけど、私もずいぶんおてんばな性格だったんだ。そのころの記憶がよみがえって、つい笑ってしまった。

そんなレイくんももう二十四歳か。彼は一体どんな青年に成長したんだろう。

さすがに今はベソをかいたりしないと思うけど、昔の面影は少なからず残っているだろう。それに、疎遠になっていく私に自分の勤めている会社の求人を見せてくれたり、部屋の提供を申し出てくれたりしたのだから——今は、思いやりのある心優しい男性になっているのではないだろうか。

親戚とはいえ、もう十年以上会っていない男の子と一緒に暮らすのは少し抵抗があるけれど、歳は優也と変わらないし、弟がもう一人増えたと思えばいい。

私はベッドから出ると、駆け足で階段を降りた。そして、その勢いのまま、キッチンで洗い物をしている母に言った。

「……私、レイくんの会社受けてみる」



採用が決まるまでの過程は、予想に反し実にスムーズだった。

由香利伯母さんを通してレイくんに私の連絡先を伝えると、程なくしてレイくんの会社から電話がきた。その後はトントン拍子にクリエイティブ・デザイン部リーダーとの面接、さらに最終面接と進み、あつという間に四月からの勤務が決まったのだ。

そして三月中旬のとある休日。応募を勧めてくれたお礼と、家の下見をしに、私はレイくんが暮らす世田谷区にやってきた。

駅には大きな複合ショッピング施設が直結していた。そこには生活に必要なあらゆるアイテムが揃っていて、まさに私がイメージする都会そのものだった。

駅から延びる大通りから一本中に入ると、今度は小ぢんまりとした雑貨屋さんやカフェなどが見えてきた。もちろんお洒落で洗練された雰囲気ではあるけれど、派手派手しくない感じが、都会に慣れない私を安心させてくれる。

その先は閑静な住宅街だ。通りかかった公園は緑に溢れ、ベビーカーを押すお母さんたちがニコ

ニコ顔でおしゃべりをしていた。

にぎやかな駅前に穏やかな居住区。暮らしやすそうな場所、とてもありがたい。

「そろそろレイくんの家が見えてくるはずなんだけど……」

公園から聞こえてくる笑い声を背に、周囲を見回す。

芸能人や著名人が住むような豪邸が建ち並ぶ通り。私の実家の周りでは絶対にお目に掛かれない、やたら窓が大きい家や、門に石造りのアーチが付いている家などがあり、実に新鮮だ。

本当にこの近辺で合っているのか自信がなくなってきた、ナビ代わりにしているスマートフォンで何度も確認してしまった。

……うん。教えられた住所だと、この辺で間違いない。

こんな高級住宅街に家を持っていながら海外勤務なんて、もったいないなあと思う。

何でも、レイくんの叔父さんは某日系自動車メーカーのインドネシア工場で工場長を務めているそう。名前を聞けば誰もが知ってる会社だし、生産ラインの責任者ともなれば、こういう高級住宅街に住んでいたっておかしくない。どうせ家を空けるなら、叔父さん夫婦は、息子のように可愛がっている甥っ子のレイくんに快く住居を提供してくれたらしい。

通り過ぎる立派な家々に「これが日常の風景になるなんて」と気後れしてきたころ、右手にある白い三角屋根の建物に目がいった。

しっくいのお白塗り壁にマッドブラウンの洋瓦が映えて、まるで海外ドラマに出てきそうな可愛い家。

建物と同じ白い外壁に取り付けられた表札には、『Kaminura』と書いてある。

筆記体で『Kaminura』。表記さえもお洒落だ。さすが都会。

表札の下に呼び出し用のインターホンが備え付けられている。急に喉の渴きを覚えて、ごくりと唾を呑んだ。

実は、まだレイくんとこの再会を果たしていないのだ。

営業部で働く彼は忙しらしく、面接で会社へ足を運んだときも会えなかった。

その分、今日はいっぱい感謝の気持ち伝えようと心に誓っていた。それに、これからは一緒に暮らすことになる。

レイくんのことを考えているうちに、最初は輪郭すらぼやけていた記憶が、次第にピピッドによりみがえってきた。

よくレイくんの髪を三つ編みにして、お姫様みたいなウェーブをかけてあげたこと。

いっしょにおままごとをして遊ぶときは、私がお姉ちゃん役でレイくんが妹役だったこと。くたくたに遊び疲れると、一緒にお風呂に入ってから眠っていたこと。

……こう考えると、弟というより妹と一緒にいる感覚だったのかもしれない。だから余計に守ってあげたいとか、世話を焼いてあげたいか思っていたのだろう。

でも一番記憶に残っているのは――

『おもっていることは、ちゃんとわかるようにいわないと、あいてにつたわらないんだよ！』

引っ込み思案なレイくんが上手く自分の意見を述べられず涙目になっているときに、私がそう

やって彼を叱咤激励していたことだ。

偉そうなことを言っていたが、台詞は当時の担任教師の受け売りだった。学校で何度も言われていたそれを、いかにも私が説いている風に言っただと思うところさばゆい。

でも、そうやって彼を励ますことによつて、私は彼の本当のお姉ちゃんっぽく振舞いたかつたんじゃないだろうか。

これからの生活においても、もしひとりっ子の彼が『姉』を求めてくるようなら、出来る限りのことをしてあげたいと思う。

なんて……ハタチも過ぎて、今更お姉ちゃんもないか。

様々な思い出を脳裏によみがえらせつつ、インターホンを押そうとしたのだけど、ふとその手を引つ込めた。そしてカバンから携帯用の鏡を取りだし、身だしなみをチェックする。久々の再会なんだから、きちんとしておかないと。

髪型にうるさくない職場ということなので、ミディアムヘアを派手すぎない茶色にし、緩くパーマをかけた。それを邪魔にならないよう、サイドで一つに束ねている。きっちり入れたアイラインもマスカラも、アプリコットカラーのチークもはげていなかった。うん、OK。

鏡をしまい、改めてインターホンに向かうと、人差し指でボタンを押した。

電子音が二回響いたあと、ブツツという通話開始の音とともに、

「……はい？」

という、男性の声が聞こえる。

予想していたより低めの、ちよつとセクシーな声。

「どちら様ですか？」

「……あ、あの、従姉の、藤堂有紗です」

「ちよつと待ってて」

通話を終え、私は大きく息を吐いた。

もう随分長いこと会っていないのだから声なんか変わっていて当たり前だ。けれども、聞こえてきたのは耳を奪われるような甘い低音の声。それが昔のレイくんの中性的なイメージとはあまりにも違っていて、びっくりしてしまつたのだ。

——しかし驚くのはまだ早かった。

直後に現れる彼自身に、私の抱いていたレイくんのイメージを大きく崩されることを。そして更には、この素敵な家に隠されているある事情を。

——このときの私は、まだ知る由もないのだった。

2

お洒落な扉を開けて出てきたのは、正統派の美青年。

ダークグレーのジップアップパーカーと黒いスウェット姿だけど、それでも十分カッコよかった。

レイくんと思しきその青年は私を見るなり、私の顔から何かを探り出そうとするように、真剣な視線を向けてくる。

「——ご、ご無沙汰してます」

挨拶を紡ぐ唇が震えた。

それを合図にしたように、ふっと真顔を解いたレイくんは、サラサラ流れる黒い髪をかき上げて、ちよつとだけ気だるそうに玄関のステップを降りてくる。

「久しぶり」

「は、はいっ」

「どうしたの、かしまって」

少し口角を上げるだけのクールな笑顔が眩しい。

昔は小柄だったのに、今の彼は私の身長なんてどうに追い越していて、結構見上げないと視線が合わないほどだ。かつての彼とは別人のようで、情けなくも緊張してしまう。

「だ、だって、レイくんすごくカッコよくなっちゃって」

「ああ。よく言われる」

「……ん？」

「上がって。中でゆっくり話そう」

「あ、うんっ」

何だろう。今サラッと肯定したよね？　こういうときは、本当のことでも謙遜するものだと思う

ていたから、一瞬どう返していいのか考えてしまった。

まあでもカッコいいのは事実だし、私も気に留めずに流すことにした。

まず案内されたのは十四畳ほどの広々としたリビング。レイくんがコーヒーを淹れてくれるというので、ソファに腰掛けて、部屋の中を見回した。

リビングのとなりが八畳ほどのダイニングスペースとなっていて、その奥がカウンターのあるオープンキッチン。リビングとダイニングはつながっており、開放感があった。

「迷わないで来られた？」

電気ケトルを操作するレイくんの手元から湯気が上る。程なくして、コーヒーの香ばしい香りが漂ってきた。

「うん。地図見てきたから」

「そう」

「それにしても、すごく素敵なお家だね。周りの家もみんな立派で、驚いちゃった」

「うちは大したことない——って、叔父さんの家にそんなこと言っちゃ悪いか。もつと先のほうに行くと、門から玄関までが果てしなく長い家とかもある。……信じられる？」

苦笑したレイくんが、スリッパの音を立てながら戻ってくる。そして、両手に持っていたマグの片方を私の前に置いた。ポルドー色に、ホワイトのドットが入った丸っこいデザインのものだ。

「ありがとう」

「インスタントだけど」

レイくんが自分のマグ——こっちは、ネイビー色にホワイトのドット。お揃いのデザインだ——  
に口をつけながら私のとなりに座った。その横顔を覗き見る。

薄めの眉にくりつとした二重の瞳が人懐っこい印象を与え、ぼつてりとした唇は幼さを残している。白くてすべすべだった肌は、少し健康的にカラーチェンジしていた。それでもきめ細やかな感じは相変わらずで、思わず触りたくなってしまふ。

「何？」

今も角度によつては女の子に見えるのでは……なんて考えていると、レイくんが怪訝そうに首を傾げる。

「ううん。あ——そうだ、この度は本当にありがとう」

私は立ち上がり、深々と頭を下げた。

「レイくんのおかげで新しい仕事先が決まったし、すごく感謝してるの」

「ああ、気にしなくていいよ。たまたま欠員が出たんだ。そしたら有紗が仕事を辞めたばかりだったというから」

再び違和感を覚えて顔を上げた。

今、もしかして、私のことを『有紗』って呼び捨てにしなかつただろうか。

『有紗おねえちゃん』ではなく、ただ『有紗』と。

「……うん。でも、住むところまで提供してもらえるなんて思わなかった。しかもこんなに素敵なお家を」

「部屋も余ってるし、会社も近いしね」

「会社まで二駅だよね？」

「ああ。悪くないだろう？」

とりあえず先に覚えた違和感は置いておき、こくと頷く。悪くないどころかとても便利だ。

「でもまだ信じられないなあ。まさか、あのちっちゃかったレイくんと同じ会社で働くことになるなんて」

「ちっちゃかったのはお互いさま。有紗とは一歳しか変わらないだし」

「……おやおや？ やっぱり聞こえた。」

今回は『有紗』と、確実に、間違いない、そう呼ばれた。

「あれ、昔は有紗おねえちゃんって呼んでくれてたよね？」

再会直後だということにこの距離の近さは何だろうと思案した結果、さり気なくにこやかに訊ねてみることにした。

「そうだった」

「そうだよ。あのころのレイくん、女の子みたいに可愛かったよねー。今だって十分可愛いけど、三つ編みで癖を付けてウェブにすると、もう本当にお姫様みたいで——」

「そんなの昔の話だろ」

懐かしさをわかち合おうと思ったのだけど、どういふわけかレイくんはお気に召さなかつたらしい。端正な顔を不機嫌そうにゆがめて、私が言い終わらないうちにスパッと切ってしまった。

「思い出話なんて年寄りくさいことするなよ。それより、家の間取りとか確認したほうがいいんじゃないの?」

「と、年寄りくさい……?」

「案内するからついてきなよ、こっち」

そう言うとレイくんは立ちあがり、スリッパの音を緩慢かんまんとに響かせながら扉へと向かっていった。気を抜いていたところにボディブローをくらって、思わずぼかんと口を開けてしまう。けれど、彼の背中が見えなくなったところでようやく我に返り、私は慌ててあとを追った。

家の一階には今通してもらったリビング&ダイニングとキッチン、それと十畳の客間に、六畳ほどの収納スペース、バスとトイレがあった。

どこもひとり暮らしの割には掃除が行き届いていて、清潔な印象。綺麗好きなんだろうな。それらを一通り回ったあと、玄関近くにある階段を上って二階に向かう。

「有紗の部屋は二階だから、覚えておいて」

「う、うん」

その呼ばれ方はやっぱり慣れない。

思い描いていた現在のレイくん像と実際の彼がかけ離れすぎていて、どうにも居心地が悪かった。

幼いころの印象から勝手に今の姿を想像していたわけだから、もちろん彼が悪いわけではない。

むしろ、いつも私のうしろをくつついて来ていた彼が健すこやかに成長したのは、喜ばしいことだと思っ。

だけど久々に会った年上の女性をいきなり呼び捨てっていうのは、いかがなものか。

……なんて思っちゃうから、年寄りくさいとか言われるのかなあ。

もしかしたらレイくんとしては、フランクに接してくれているつもりなのかもしれない。一緒に住むんだし、ある程度距離を縮めた付き合いをしたいと思っっているのかも。

やりづらいななんて感じたら、それはレイくんに失礼だ。

階段を上り切ると、廊下を挟んで左右に三つずつ扉が見えた。

レイくんは一番奥まで進むと、右手にある扉を押し開ける。

「ちなみに、向かいが俺の部屋だから」

ということとは、左手側がレイくんの部屋か。覚えておこう。

八畳ほどの室内には、シンプルな木製のベッドとマットレスだけが置かれていた。ベランダに続く大きな窓からは日の光がたっぷりと入ってきている。太陽が高めに出ている間なら、明かりはいらないだろう。

「南向きだから、日中は気持ちいいと思う。夏は暑いくらいかも」

「嬉しいなあ、ありがとう……ちょっと出てみてもいい?」

「うん」

私は窓を開けてベランダに出た。心地よい春風に頬ほを撫でられ、思わず目を細める。

胸のあたりまである柵さくに体重を預け、大きな家が並ぶ街並みを眺めながら言った。

「四月からは毎朝この景色を見られるんだね」

「あたりまえだろ。ここが有紗の家なんだから」

いつのまにか、レイくんも私のとりに来ていた。私と同じように柵にもたれながら、静かな世田谷の住宅街を見下ろしている。

「レイくん、こんないいところにひとりで住んでたなんてうらやましいなあ」

「……………」

一瞬だけ、レイくんの目が泳いだように思えたけど、私は気にせず続けた。

「でも、私だったらちよつと寂しいかも。広い分、余計にひとりだつてことを実感する気がして」

それは私が失恋をしたばかりで、孤独という言葉に敏感になっているからかもしれないけど。

「……今のところ、寂しくはない。それに」

レイくんがこちらを向いた。

「——これからは有紗と一緒にだから」

玄関から現れたときと同じ、とても真っ直ぐな瞳で私を見つめる。

見つめ返すのがはばかられるくらいの、真剣な目。

「そ、そう」

「有紗と一緒に暮らせるようになって、嬉しい」

甘い声のレイくんが、付き合っている彼女にしか聞かせないような優しい声色こわいでそう言うものだ

から、戸惑ってしまった。

「……………やだ、その台詞せりふ、まるで好きな人に言うみたい」

ドキドキしてしまいそうで、私はあえておどけて言ってみた。

嘘。ドキドキしそうなんじゃない、すでにドキドキしている。

レイくんが美青年だからという理由ももちろんあるけど、それだけじゃなくて。

今まで付き合ってきた男性達は、自分の気持ちを積極的に伝えてくれなかった。直行もそう。

『好き』とか『愛してる』とか、『一緒にいられて嬉しい』とか。そういうのを雰囲気察して欲しいって人ばかりだったから、ストリートな言葉に耐性がないのだ。

きちんと言葉で表現してもらって、こういう感じなのか。

……悪くない。ううん。嬉しい、かも。

っていうか！ きゅんとしている場合じゃない！

久しぶりに会う従弟いとこ相手に胸を高鳴らせたりするなんて——一体何してるの、私。

彼氏と別れて寂しいから、誰彼構わずにときめきを求めてしまっているのだろうか。

だとしたら、自己嫌悪に陥る。そんなつもりなんてないのに。

ドキドキしたり、そんな自分を叱咤しつたしたり、落ち込んだり……ものすごい速さで思考を巡らせていると、レイくんが首を横に振った。

「みたい、じゃない」

「えっ?」



どういう意味だろう——と考えるより先に、彼の片手が私の頭に伸びる。後頭部に回ったその手に支えられたかと思つたら、彼の綺麗な顔が近づいてきた。スローモーション映像のようにゆっくり、ゆっくり。きつと時間にしてみたら一瞬の出来事なのだろうけれど。

それから唇に何かが触れた。しばらく忘れていた、温かくて柔らかな感触。  
「——っ!？」

それが何かを理解した瞬間、声にならない悲鳴を上げてレイくんの胸を押した。

……え？ え、えええ？

今、キスされた？

「れ、レイくん、一体、な、何をっ……!？」

「何って、キスだけど」

そういうことを聞いてるんじゃない!

久々の再会を果たしたばかりで、キ、キスって——

ど、ど、どうしてこんなことに……!？」

「ただいまー」

「おい、声でかいよ」

頭の中がこんがらがって動けないでいると、玄關の扉が開く音とともに男の人の声が聞こえてきた。それも二人分。

ふつと魔法が解けたみたいに力が抜けた私は、レイくんに背中を向けて部屋の中に駆け戻った。

まだうまく状況が把握できていない。だけど——

……あれ？ ちょっと待って。

聞こえてきた台詞せりふに引つ掛かりを覚える。

『ただいま』——と。彼らはそう言っていなかっただろうか？

「つたく、アイツらもう帰って来やがったのか」

私のあとを追って室内に戻ってきたレイくんが、窓をロックしながら忌々いまいましそうに呟つぶやいた。  
帰って来たって？

「……ーん？ い……のー?」

「……で……るんだろ、ど……」

家の中に入って来た彼らが、何を言っているのかまでは聞きとれない。

階段を上る音に交じって届くのは、ちよつと間延びしたような高めの声に、落ち着いてはいるもののはつきりと通る声。ベランダから聞こえた二人の男の人と思おぼしき声が、確実に二階へと近づいてくる。

「ねーレイちゃんー。いるならいる、いないならいないって返事してよー」

いない場合は返事をできないだろう——と心の中でツツコミを入れつつ、私は振り返ってレイくんを見た。

「お友達?」

「まあ、そんなもの」

そうか、レイくんの知り合いか。なら親しげな呼び方も頷ける。それにしても、なぜ『ただいま』と言ったのだろうか？

「お友達が遊びに来る予定だったの？ ごめん、すぐ失礼するね」

「いや逆。このときのために追っ払ったはずだったのに」

「……？」

意味がわからない。

「レイーちゃん……あら」

「……ここじゃないな」

彼らは近くの部屋の扉を開けたようだけど、そこでは目的の人物を見つけることができなかったみたいだ——レイくんは私の傍に居るのだから、当然なのだけど。

「じゃ、あっちだ。例の空いてる部屋」

落ち着いた声音こゑの男の人が促し、足音は更に接近してくる。

「ちよつとどいて」

扉の前にいた私を下がらせると、レイくんは不満げな顔でやや乱暴に扉を開けた。

「お前ら、何で帰って来たんだよ」

廊下に向けてなじるように言ったレイくん越しに、人影が二つ見える。

「レイジロ、やっぱりここか」

耳心地のいい声でそう言ったのは、黒髪にメガネの男性。人がよさそうな顔立ちながらキリツと

した雰囲気もあわせ持つ好青年だ。白いシャツの上にネイビーのスウェット地カーディガン、ボトムスはベージュのチノパンという清潔感のあるファッションがよく合っていた。

「ただいまーレイちゃん」

語尾が伸び気味の彼は、脱色した長めの髪と、胸元にドレープの入った黒いアシメカットソー、グレーのサルエルパンツというなんとも個性的な出で立ち。吉と出るか凶と出るかが微妙な服装にもかかわらず、それをしつかり着こなせる顔とスタイルをしている。

二人はレイくんの他に誰かがいることを予想していたらしく、部屋の入口から何かを探すように覗き込んできた。

そして私を見つめるなり、まずは目立つ髪色の青年が「あつ」と小さく叫んだ。

「どうもー、はじめましてー。オレ、シンって言いませう。青山慎。よろしくー」

「どつ、どうも、はじめまして。私は、レイくんの従姉の——」

底抜けに明るく笑いかけられて、私もすかさず頭を下げた。

今度は私が自己紹介する番とばかりに、藤堂の「と」を発音しかけたところで、

「藤堂有紗さん、でしょ？」

と、フライングしたのはメガネの青年。何で知っているのだろうと、顔を上げ、視線で問うてみる。

「あ、ごめんごめん。レイジロから聞いてたから」

彼は苦笑を浮かべ、続けた。

「僕はアヤセ。綾瀬涼」

「青山くん、綾瀬くんね」

「忘れないように復唱していると、青山くんがおかしそうに喉を鳴らす。

「やーだな、そんなよそよそしい呼び方しないで。もう他人じゃないんだしー」

「……?」

他人じゃない?

よく意味がわからず、中途半端な相槌を打っていると、綾瀬くんも笑って頷きを返す。

「そうそう。有紗さんのほうが年上なんだし、もっとフレンドリーに、下の名前で呼んでよ」

「これから一緒に暮らすんだから、そのほうが互いに気楽でしょー?」

「いつ?」

青山くんが至極当たり前みたいに言うものだから、息継ぎをするような変な声を上げてしまった。

「一緒に? ……またまた、そんな冗談」

つい、何の面白みもない、まともなリアクションを返す私。感じが悪かったかなと思い、今更ではあるけれど、「あはは」と笑いをつけてみる。

「冗談?」

ところが、青山くんはきよんとした顔で首を傾げたのだ。

え? 何で?

「——ねーレイちゃん。まさかとは思うけど、有紗ちゃんにオレたちのこと、話してないのー?」

会話がかみ合っていないことを察したらしい青山くんが、ちよつとだけ声をひそめてレイくんに訊く。口元に添えられた手には、蛇が絡みついたような指輪がはまっている。

「話そうとしたところでお前らが帰ってきた」

今まで私たちの会話を黙って聞いていたレイくんがため息をついて続けた。

「つていうか、しばらく家空けろつて言つたろ。何、帰ってきてんだよ」

「いやー、だって未来の同居人にキチンとご挨拶しておきたいじゃんー。リョウくんもそー思うでしょ?」

「ああ。大体、自分ちにいつ帰ってこようが自由だろ」

ただいま。一緒に暮らす。同居人。自分ち。

頭の中でバラバラに点在していた単語たちが、一つに集約される。

「あの……えっと、あなたたち、この家に住んでるんですか?」

導き出した結論を、まさかと思いつながら口にしてみた。

違うよ……ね?

「うんー、そうだけどー?」

——そう願つたのも空しく、青山くんの緊張感のない声がしれつと答え、

「で、今月末からは有紗さんも一緒に暮らすんでしょ? よろしくね」

綾瀬くんがレンズの向こうで優しい笑みを浮かべた。

い、一緒に、暮らす……だって?

「な……な、なな、何それっ!? そんなの聞いてないんですけどっ!?」  
四人暮らしでもまだ十分に余裕がありそうな、この広く静かな家に、私の悲鳴に近い叫びが響き渡った――

3

「――だから、今日家を見てもらうついでに話そうと思ってたんだって」

腰を落ち着けて話せる場所を……と、一階のリビング&ダイニングに移ってきた私たち。

ダイニングテーブルを囲んで、私となりにはレイくん、向かい側に青山くんと綾瀬くんが座っている。

私は、しくじったと眉をひそめるレイくんのほうを向きながら言った。

「そ、そんなの困るよ……。私は、レイくんがひとり暮らししてことだったから、一緒に住まわせてもらおうと思ってたのに」

「ひとり暮らしだなんて言っていないけど」

「えっ……?」

「有紗のお母さんからの電話でも訊かれてないし、この家については『部屋が余ってる』って言い方しかしてない」

「そ、そんなあっ」

そりゃあうちのお母さんだって、他に同居人がいるなんて想定してないよ。

だいたい、訊かれてないから言わないなんて、そんなの言い訳にならないっ!

「俺は悪くない」とでもいう態度のレイくんに納得がいかないながらも、今度は身体を前方の青山くんと綾瀬くんに向ける。

「二人は、どうしてレイくんのお家に住んでるの?」

「おー、それ聞いちゃうー?」

先に口を開いたのは青山くんだ。

「なーに、簡単な話だよー? オレの場合は、親からの仕送りストップされて家賃払えなくなっちゃって」

「仕送りって?」

「あー、オレこの中で唯一の大学生なのー。歳はみんなと一緒だけだよー」

ちなみに四年ね――と指を裏向きに四本立てた。蛇の指輪の緻密な細工がよく見える。

……その割には、随分高価そうなものを身に着けてるみたいだけど。

「留年しすぎて『そんなんじや大学に行ってる意味ないだろ!』って、父親に怒られてねー。がつつりバイトしてもお金カツカツで、どうしょーかなーって思ってたら、高校時代の友達のレイちゃんに『ウチこない?』って誘ってくれてさー」

「俺は誘った覚えはないけど。シンが勝手に荷物持って押し掛けてきたんだろ」

「あはは、そーだっけー？」

すかさず入るレイくんのツッコミ。それを、青山くんはへらつと笑って誤魔化<sup>ごまか</sup>していた。

「……綾瀬くんは？」

「僕は単純に会社に近いからだよ。シンと違って金銭的に切羽詰まってるわけじゃないけど、会社の最寄りまで二駅だっというし、家自体も綺麗だし……」

「会社の最寄りまで二駅？」

その言葉、つい最近聞いたなと思う。

「——ああそうだ。有紗さん、僕らの会社に入ることになったんだね。おめでとう。僕、レイジロと同じ営業部で働いてるんだ」

ということは、綾瀬くんはレイくんの同僚ってわけか。——って、そんなことより。

「レイくん、由香利伯母さんは、この状態を知ってるの？」

「さあ。一度もこの家に来たことないから、知らないんじゃないの」

「いやー、さすがにレイちゃんのママにバレたら、オレ住みづらいわー。勝手に転がりこんじゃってるわけだしさー」

「というわけで、レイジロのお母さんには内緒ね、有紗さん」

綾瀬くんがにつこり笑いながら、唇の前で人差し指を立てた。

……いやいや、何か、このまま二人が住み続けること前提みたいになってるけど。

「で、でもっ……妙齡<sup>みょうれい</sup>の男女が一つ屋根の下っというのはどうなのかな」

このままじゃ彼らのペースにのせられてしまう。焦った私は反論した。

「リヨウくん、ミヨローレー？ って何？」

「それなりにいい歳のつてことだよ」

「へー。頭いいんだね、有紗ちゃんて」

とりわけ難しい言葉を使ったつもりはなかったんだけど、青山くんほとんどの綾瀬くんに意味を問うている。そして納得した後、あははと笑い出した。

「なんだーそんな心配か。あんまり構えずに、新しい男友達が出来たなーくらいのテンションでてくれればいいのに」

「いや、そういう問題じゃ……」

男友達と同じ家に住む女性なんて滅多にいないだろうに。少なくとも私の周りでは聞いたことがない。

「あー。有紗ちゃんて、もしや男女の友情は成立しない派かなー？ でもダイジョブ、オレらのことはさー、従弟<sup>じゆい</sup>が二人増えたと思ってくれたらいいって」

ねー、と綾瀬くんに目配せをすると、彼も頷<sup>うなず</sup>く。

「そういうこと。だから、従弟っというか——家族。そう、家族だと思ってくれたらいいんじゃないっ」

ピツタリはまったと思ったのだろう。綾瀬くんは強調するように声を高くして言った。

……家族だって？

「そ、そんなの無理だよ!!」

強い口調になってしまった。和氣藹々わきあいあいとしていた空気が、シーンと静まりかえる。言い争いを望むわけじゃないけど、もう黙ってはいられない。矢継ぎ早やつつばやに続けた。

「家族だなんてそんなの無理っ。わ、私は従弟のレイくんだったら、血もつながってるし、小さな頃を知ってるっていうのもあって、一緒に暮らしても安心だなんて思ったわけなの。でも、青山くんや綾瀬くんが同居人だなんて知らなかったし、初対面で人となりのわからないあなたたちといきなり一緒に暮らしてって言われても、抵抗があるというか……」

ここまで一息で言ったところで、ぐるりとみんなの顔を見回してみた。

捨てられた子犬のように悲しげな顔の青山くんと、困惑気味の綾瀬くん。

そして、不服そうというか、明らかに気分を害しているレイくんのふてくされた表情。その全てに気圧けおされ、うっと言葉に詰まる。

「と、ということ……正直言って、私は気が進まない、です……」

自分が間違ったことを言っているつもりはないけど、口調が強すぎただろうか。不安になって、どんどん語勢が弱まってしまった。

私の言葉を受け、みんなはそれぞれの表情のままに黙っている。

とりわけ気になったのはレイくん。彼はなぜこんなに不満そうにしているのだろうか。

お友達との同居を真っ向から拒んだのが気に入らなかつたのだろうか？

けど、そんなの当たり前じゃない？ こういう言い方は失礼かもしれないけど……突然、赤の他

人と生活するなんて、私の感覚では考えられない。というか誰だつてそうだろう。そもそも、いくら訊きかれなかつたからといって、同居人がいると告げなかつたレイくんに非があるのではないだろうか。

「……どうするんだ、レイジロ」

私たちの間に広がった気まずい沈黙を、綾瀬くんが破った。

「どうするって、何が」

「有紗さん、すごい困ってるみたいだけど」

「そーだよー。なんかこのままいくとー、オレたちが悪モノつてかー、邪魔モノみたいな流れになっちゃうんですけどー？」

悪者だとか邪魔者とまでは思っていないけど、彼らとの同居は困るという意味では同じなのかもしれない。

……とはいえ、もどから住んでいるのは二人のほうだし、私が出ていけなんて言える立場じゃないことはわかっている。私は、じつとレイくんの反応をうかがった。

「そうは言っても、先住者はシンとリョウだし。二人を追い出すっていうのは違うだろ」

への字にしていた口から吐き出された言葉は予想通りの内容。けど、そうなる……

「それって、二人はこのまま、この家に住み続けるってこと？」

「うん。もとはといえはそのつもりで有紗にも声を掛けたんだし、二人に出ていけなんていう理由はどこにもないから」

続きを聞いて、私は目を大きく見開いた。

そのつもりって、そんな無茶苦茶な！

こっちは、先に二人が住んでいることなんて知らないのに。私だけじゃない、由香利伯母さんやうちの母親だって……

「うちの両親も許さないよ。独身の一人娘が、見知らぬ男の子たちと同居だなんて」

「まあ、そうだろうね」

私の言葉に対して、レイくんの反応は淡々としていた。

「確かに許さないと思うよ。でもさ、一緒に住めないとしたら、困るのは有紗のほうじゃないの？」

「……」

思わず黙ってしまった私に、レイくんは気だるそうに頬杖をついて続けた。

「有紗の親ってさ、二人とも有紗がこっち——東京に出てくるのに反対だったんだろ。うちの母さんが言ってた。女の子の親らしく、セキュリティを心配してたみたいだけど、それをうちの母さんが俺との同居を条件に説得したわけ」

「うん、知ってる」

「本当なら優也のところ転がり込むのが一番だったんだろうけど、さすがに新婚の家庭に入っていくわけにはいかないしな。だから、有紗が東京で暮らすっていうのは、この家で生活するってことが前提になってる。なのに『この家には住めませんでした』なんてことになったら……どうなる

だろうね」

つまり、この家で生活するからこそ、私は東京で暮らすことができるって伝えたいようだ。言いかえれば、この家に住まずして東京での生活はない——と。

「そ、そんなっ。就職だって決まったんだし、いくら何でも、ここに住めないからって地元に戻れなんて言わないと思うけど」

そう口にしてはみたものの、我ながら苦しいと感じた。

「でも今回有紗が家を出てもいいって話になった決め手は、俺と同じ会社で、同じ家だっていうことらしいから。よくわからないけど有紗のお母さん、俺を頼りにしてくれてるみたいで、俺が声掛けなかったら東京行きなんて絶対なかったと思うんだけど。……自分でも心当たりあるんじゃない？」

まさに、その通りだろう。ぐっと奥歯をかむ。

「有紗だって、せっかくこっちで就職決まったのに、またゴタゴタするの嫌じゃない？」

「う……」

確かにそれはその通りだ。

念願叶ってやっと華の東京生活が始まるどころだというのに、スタートする前に終了を迎えるなんて、辛すぎる。

「なーんか警戒してるみたいだけど、別にオレたち有紗ちゃんが嫌がることは何もしないよ？」

「そうそう。あくまで同居人だと思ってくれればいいだけだし。気負う必要ないんだから」

押され気味の形勢を見逃さなかった青山くんが陽気に切り出すと、綾瀬くんも相槌を打つ。

「ねーリョウくん。仮にこっちでひとり暮らしができたとしても、何だかんだでお金かかるよね？」

「うん、家賃に水道光熱費にプラスして食費を捻出しなきゃならないし。さらには衣服代とか美容代とかかかるとか、いろいろ大変だよ」

「でもさでもさ、もしこの家に住むとしたら話は違うよね？」

「家賃は0だし水道光熱費や食費は割り勘。稼いだら稼いだ分だけ自分で使えて、貯金までできちゃうってわけだ」

「おぉー！ すごいねーリョウくんっ！」

気が付けば深夜の通販番組みたいなわざとらしいノリになっているけれど、彼らが言っていることに嘘はない。シェアハウスにはシェアハウスの利点があるのは確かなのだから。

「嫁入り前の娘さんには、大変おススメなんですけどねー。浮いた分、習い事やオシャレに回せるでしょー？」

『嫁入り前』という単語が、自分でも驚くほど胸に刺さった。

青山くんは私が婚約者にフラれたことなんて知らないだろうし、全く意識せずに使った言葉なのだろう。だけど私にとっては、簡単に流せる単語ではなかった。

私の頭の中の大きなスクリーンに、大好きだった直行との日々が駆け抜けていく。

事務所の入社式の帰りに初めて言葉を交わしたときのこと。

三回目の居酒屋デートで『付き合ってほしい』と交際を申し込まれたときのこと。

初めて直行の家に泊まりに行ったときのこと。

『近いうちに結婚しよう』と指輪を渡されたときのこと。

最後は――

『好きな人が出来たんだ。婚約はなかったことにしてほしい』

私と直行の関係が、終わったときのこと。

それらが走馬灯みたいに。

そして、現実には目にしたことはないはずの、私ではない女の子と楽しそうに笑い合っている姿がスクリーンにチラついて、叫び出したくなった。

……ああ、そうだったんだ。やっとわかった。

東京に憧れていたし、ずっと上京したいという気持ちを抱いてもいた。だから、今回は自分を変えるために上京を決意したと思っていたのだけど……

本当のところは、あの二人から離れた場所に行きたい気持ちが占める割合のほうが断然大きかったのだ。自分が思っているよりも、ずっと。

会わないで済むならそれに越したことはない――という程度のもりだったのに。実際には、直行と滯ちゃんの存在が、これほどまでに私の心を占めていたなんて。

それに気付くと、今度は地元へ帰ることに対する恐怖が湧き上がってくる。

もしこの家に青山くんや綾瀬くんが住んでいることを、母親に知られてしまったら。地元に戻ってくるようにと命じられたら。



——眩暈めまいがした。

「わかった」

口から出た声は、自分でも驚くほどに低かった。

「……ごめんなさい。青山くんや綾瀬くんの話を聞いて、考えが変わったよ。二人の言う通り、従弟いとこが三人になったと思えば、大した問題じゃないよね」

あたかも彼らの説得で意見を変えたかのように振舞うと、青山くんがしめたとばかりに頷うなずく。

「そーそー、そーゆーこと！ わかつてくれたー？」

「うん。お金が浮くっていうのもっともだと思うし、合理的かなって」

言いながら、となりのレイくんを見た。

彼は、こうなることを予想していたかのような意地の悪い笑みを浮かべている。

……うう、私が納得するしかないっていうの、わかつてたんだ。感じ悪いっ。

「それじゃ決まり。四月からは有紗もシェアハウスの一員ってことで」

そして、レイくんがそう口にした瞬間。

私と従弟いとことその友達二人という、奇妙な同居生活が決めたのだった。

4

三月の末日。暖かな日差しが降り注ぎ、地元では例年より早く桜の見ごろを迎えたこの日。細々こまごまとした荷物の詰まったキャリーを引きつつ、私は晴れて上京した。

神村家前に到着し、律儀にインターホンを押して応答を待つ。すぐにレイくんが玄関の扉を開けて出てきてくれた。

「そのまま入っていいのに」

「あ、うん。でも、何となく」

前回と同じ部屋着のようなりラックスした格好だけど、相変わらずの美青年っぷり。つい動揺して、答え方がぎこちなくなってしまうた。

「荷物はそれだけ？」

そんな私の様子など意に介さず、彼は小脇に置いていたキャリーを顎あごで示してみせた。

「う、うん」

「貸して」

彼はステップを降りて私の傍まで来るとキャリーをひよいと持ち上げ、先に家の中へと入って行く。

彼と会ったのは、家の下見をしに来たあの日以来。

の割に、ちょっとそつけない対応な気もするけど……仕事のスケジュールを工面して平日である今日を空けてくれたらしいし、そのせいでお疲れ気味なのかもしれない。

「……お邪魔します」

まだお客さん気分の私は扉の前でそう言ってから中に入った。

「おー、有紗っち久しぶりー」

玄関で靴を揃えていると、聞き覚えのある高い声が降ってくる。

「あ、青山くん」

顔を上げ、声の主の名前を呼ぶと、彼は舌を鳴らしながら人差し指を振ってみせた。

「違うでしょ、シンでしょー。はい、もう一回」

「えっと、シンくん、久しぶり」

「はーい久しぶりー。有紗っちは元気にしてたー？」

私がファーストネームで呼び直すと、シンくんは嬉しそうにフルスマイルを浮かべた。

一緒に暮らすことが決まってから、私たちは余所余所しさを払拭するために互いを名前で呼ぶことにしたのだ。で、どういうわけかシンくんには『有紗っち』と呼ばれることになった。

「もう荷物は全部届いてるよー。机とかチェストとか本棚とか、おつきい家具は全部言われた通りに配置してあるー」

「ありがとう」

「いえいえー。人数が増えるのは、オレらとしてもありがたいからねー。お金の意味で」

「……あ、あははは。だよねー」

素直すぎる発言に乾いた笑いもれる。

同居を拒んだとき、シンくんやリョウくんがやたら私を説得するのは何故なのだろうと思っていた。けれど、それはどうやら人数を増やして水道光熱費や食費を更に浮かせたかったためらしい。

「じゃあ、自分の部屋見てくるね」

「いつてらっしやーい」

手を振るシンくんを残し、私は階段を上っていく。

廊下の一番奥にある私の部屋には、キャリーを置くために先にレイくんが向かっている。その扉をノックして、そーっと開けた。

「だから、自分の部屋なんだしそんなことしなくていいのに」

扉を開けてすぐの場所。ちょうど部屋の真ん中あたりでキャリーをおろしたレイくんが、こちらを向いて笑っていた。

「そうなんだけど、何だかまたここに住むって実感がなくて」

私も笑って言う。

夢だった東京での暮らしが始まるということも、男の子ばかりの家で生活し始めるということも、そのどちらも、私にとってはまだ現実と思えないのだ。

「レイアウトはこんな感じだけど、直すところはある？」

レイくんが部屋の中を見回す仕草をしたので、私もそれにならった。

扉側の壁に本棚。向かって右にベッド——これはもともとこの部屋に備え付けてあったもの——、左側の壁に沿って手前に机と椅子、奥にチェストが二つ。クローゼットがあるので、これで十分だ。「大丈夫。ごめんね、大変だったでしょ」

シンくんが言っていた通り、全て私がお願ひした配置になっている。私が到着するより先に部屋を完成させてくれていたとは。

「雑貨と衣服のダンボールには一切触つてないから安心して。あと、カーテンなんだけど、柄物の遮光カーテンしか入ってなかったんだけどいいの？」

「え？ 本当？」

爽やかな葉のモチーフのカーテンと一緒に、ミラーレースのカーテンも荷物に入れていたつもりだったのだけど、うっかり忘れてしまったのだろうか。

「よかったら、うちに予備があるからそれ使つて。サイズも合ってるから」

彼がベッドのほうを顎で示したので視線で追つてみると、まだベッドメイクの済んでいないマットレスの上に、レースのカーテンらしきものが折り畳まれていた。

手に取つてみると、優雅なスカラップが施された、いかにも女性好みなデザイン。この窓にサイズが合うのなら、かつて誰かが使っていたのだろうか。

「うん、ありがとう。助かる」

私はレイくんにお礼を言つて、早速ベッドメイクや荷物の整理にとりかかった。

持ってきた荷物が少なかつたのと、大きな家具をあらかじめ配置してもらっていたおかげで、引越し作業は滞りなく進んだ。リョウくんが仕事から帰宅して私の歓迎会を始めるころには、ほぼ片付けが終わつていた。

「じゃあ、有紗ちゃんの入居を祝して、乾杯」

私のためにトリョウくんが買ってきてくれたシャンパンをグラスに注ぎ、ダイニングテーブルの上、彼の号令で四つ重ねる。グラスはカチンと涼しげな音を立てた。

「明日から有紗ちゃんもうちの社員になるんだよね。そっちでもよろしくね」

シンくんの私への呼称が『有紗っち』になったことで、今度はリョウくんが私を『有紗ちゃん』と呼ぶようになった。「こちらこそ」と頷きながら、デリバリーで注文したサラダやピザを三人に取り分ける自分が、実はまだ信じられないでいた。

地元に戻りたくないからって、やはり早まってしまうたか。従弟の家だといっても、知らない男が二人も住んでるところで暮らし始めるなんて。

……まあ、私は誰もがうらやむような美人じゃないし、ドギツイ失恋を味わったばかりで、そんな心配は不要かもしれないけど。でも、万が一ってこともある。

そう、この間みたい……

「……何？」

「あ、ううん」

私は無意識にその人物——レイくんのことを見ていた。視線に気付いた彼が、シーフードピザを